

二〇二二年度 第一回 入学試験 問題

適性検査 I (立川国際・南多摩型)

試験時間 四十五分

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**4ページ**にわたって印刷してあります。
- 2 声を出して読むではいけません。
- 3 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、**問題用紙と解答用紙を提出してください。**
- 4 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 5 **受験番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

佼成学園女子中学校

受験番号

1

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

未来のことを考えるのは、とても心が躍る楽しいことです。たとえば、月に住むことができるだろうか、とか、リニアモーターカーの次の世代の乗りものはどんなものだろうか、とか、スカイツリーよりも高い建てるのはいつ、どうやってできるだろうか、とか、がんを根治する薬はいつできるのだろうか、とか、とてもワクワクしますね。

でも、食べるという行為が今後どのように変わっていくのか、そんな未来の予想はあまりなされません。「食べるもの」は、「乗りもの」や「建てるもの」と比べて地味な印象があるかもしれません。あるいは、人間は食べないと生きていけないから、そんなに変わることはないのでは、と思う人もいるでしょう。けれども、食べるものの未来を考えることも、とくに若い人たちにとってはとても重要です。なぜなら、未来が自分たちの望むとおりに変化してくればよいのですが、必ずしもそうではない可能性があるからです。

たとえば、こんな未来だって思い描くことができます。一日一回、小さな食べものを食べて、それで一日分の栄養補給ができるという世の中です。ある食品会社の広報部の方が、池袋の本屋さんでのトークショーのあと、わたしにこんなことを教えてくれました。これさえ食べられれば一日の栄養を賄える食品を開発したけれども、いざ試食してみると、とてもまずかった、と。ただし、これを理想だと考える

人がいることも事実です。知人から聞いたのですが、ある集まりで、食べる体験を、※ヴァーチャルリアリティなどの力を借りて、できるだけリアルにしようと考えている人が、その目的として「食べるという煩わしいことから人間を解放するために」と言ったそうです。食べることが「煩わしい」と考える人がいることに、わたしはとても驚きました。そして、この話を聞いて気づきました。もっと仕事をするためには、もっと経済成長するためには、ご飯の時間を削って働いてくれたほうがよい、と考える人には、こうした技術が完成するのはありがたいことなのかもしれない。人間が食べる時間を節約できれば、もっと人類の文化芸術の発展に役立つと考える人にとっても、やはり素晴らしい話なのかもしれません。食べることが数秒で終わってしまう未来。その代わりに、食べる時間を、映画、読書、ショッピングなど、別の楽しいことに充てることができる未来。みなさんはいかがでしょうか。

わたしは食べることをやめて、もっと勉強時間を増やす、とか、人類の文化をより高尚なものにするとかいうことには大きな疑問を感じる人間です。

なぜかといいますと、一つは、食事みたいな楽しいことが人びとの暮らしからなくなってしまうのは、もったいないと思うからです。この楽しみを失ってまで到達すべき高尚な文化などあるのでしょうか。たしかに、わたしだって、食べることを忘れて仕事に没頭することも

あります。だけれども、その仕事が終わったあとに食べるご飯はまた格別のおいしさです。わたしが単純に食いしん坊ぼうだけなのかもしれないませんが、こんなに楽しいことができなくなるなんて、とてもつらいことだと思えます。現に病気で食べることが難しくなって元気がなくなる人はたくさんおられます。

言語聴覚士ちようかくしという仕事をしている古くからの親友がこんなことを教えてくれました。鳥取とっとりの病院で働く彼は、病気になってご飯を飲み込むことが難しいお年寄りにつきそって、ご飯を噛かんで飲み込むためのお手伝いをしています。彼が言うには、胃いに穴をあけて、そこからご飯を流し込む「胃ろう」という装置にするよりも、頑張がんばって口からご飯を食べられるようになったときの患者かんじやさんはいつもより生き生きとしていた、と。それで彼は、ギターを持って高齢者こうれいしやのまえで歌をうたったりしながら、いい雰囲気ふんいきをつくることにも労力を割きいたと聞いて、自分はいいい友だちをもつたな、と、とても感激かんじしました。食べることは、実は、人間が人間であるための根源的な行為だと思うのです。けれども、こういう未来はほとんど現実化けんじたいしやくしています。※サプリメントの誕生や、プロテインバーなどの携帯食けいたいしょくの発達です。ちなみに、『戦争がつくった現代の食卓しょくたく—軍と加工食品の知られざる関係』(アナスタシア・マークス・デ・サルセド著、白揚社はくようしゃ、二〇一七年)という本に書いてありますが、プロテインバーは、アメリカの軍人のために軍隊が開発したもので、戦争と密接みせつに関わっている食品であることを補足しておきましょう。

二つ目に、こんな未来も描けるかもしれません。できるだけ早く食事が済きむように、おいしい味あじや香りかおのするムースやゼリーがどんどん開発され、売られていく、という未来です。これだと、手軽だし、消化も早く、胃腸への負担も少なくなってよいかも、と思う人もおられるかもしれません。実際に、現在、すぐに食べられるゼリー食品は薬局やコンビニなどで安く手に入れることができます。

実は、こうした未来は、すでにアメリカで求められて来ました。日本語で『家政学の間違まちがい』(ローラ・シャピロ著、晶文社しよぶんしゃ、一九九一年)と訳された英語の歴史書があります。

この本は一九八六年に出版され、現在も読み継つがれています。わたしも『ナチスのキッチン』という本を書くとき、参考にした本です。一九世紀から二〇世紀にかけての世紀転換期てんかんきで料理の合理化、効率化が進んでいくという内容。アメリカで、胃腸の消化を助けるために、今後はできるだけ細かく刻んでドロドロとした、噛む時間があまり必要ない※レシピを開発すべきだ、という考えが、一九世紀に流行したと書かれています。この考えは一定の評価を得て、流動食のような食べものが普及ふきやくするのを助けました。

歯かみごたえをなくす動きです。実は、こうした流れもすでにあります。歯ごたえのある食べものは嫌きらわれるようになり、噛み切りやすいもの、すぐに飲み込めるものが求められています。それがもっと進んでいくと、食べものはすべてゼリーやムースになってしまいかもしれません。

ここで思い出すのは、いまから五〇年前の一九六八年、アメリカで公開された映画『二〇〇一年宇宙の旅』です。この映画では、「ハル」という名前の人工知能のようなものが宇宙船の全システムを制御しているのですが、いま見ても本当に面白いです。この映画に、宇宙旅行中に宇宙食を食べるシーンがあります。無重力状態で食べものが浮かさないように、さまざまな色彩のムースみたいな食べものがプラスチックの皿にくっついていて、それをスプーンで削ぎ落として食べるのです。お世辞にもおいしそうとは言えませんが、白くてさっぱりとしたツルツルの宇宙船の船内のイメージにぴったりとあっていました。実は、この食事は、NASA（アメリカ航空宇宙局）が映画製作のために独自に開発したものだっただけです。みなさんはいかがでしょう。か。食べものから噛みごたえがなくなっていく未来。わたしは望ましいものではないと思います。噛むということは、飲み込むことでは得られない栄養を体内に取り込むために必要な行為であり、わたしはもつと重要な意味合いがあると思います。人間は給油される自動車ではありません。できるだけスムーズに栄養が体内に注入されることは、人間を自動車にするようなものだと思います。しかし、人間は噛みます。脳内に血が巡ります。しかしそれだけではありません。噛むと食事中に時間が生まれます。この時間が、食事に、「共在感覚」、つまり「同じ場所に・ともに・いる」気持ちを生み出すのです。この遠回りの行為が、給油のように直接消化器官に栄養補給しないことが、人間を人間たらしめているように思えます。たとえば、食材である生

きものやそれを育ててくれた農家や漁師のみなさん、あるいは、料理をしてくれた人に対して感謝の気持ちをもつことも、人間ならではの感覚だと思ふのです。

食べものが一日一回で済むクッキーのようなものになること、栄養素満点のゼリーやムースになること。どちらの未来もすでに進行中の話です。では、以上の二つの未来とは違った未来はどのように描けるでしょうか。これをみなさんと一緒に考えていきたいのですが、そのままにわたしの考えていることを少しお話させてください。

それは、噛みごたえがあつて、おいしい食べものが、全部無料になる未来です。いまは、食べものの流通は一部の 대기업によってコントロールされており、そうである以上、そんなことは絶対に不可能だ、と言う方もおられるでしょう。しかし、実は実現できないこともないというのがわたしの実感です。というのも、実際に、わたしの家の近く中華料理屋では、皿洗いを手伝えれば代金は無料になります。もちろん、使用済みのお皿を何枚も洗わなければなりませんから「タダ」ではありませんが、それでもお金に困ったときに「こういうお店があると、ちよつとほつとするような気持ちになるのはわたしだけでしょうか。最近「子ども食堂」といって、夜に家族とご飯を食べることができない子どもたちが自由に入って、信じられないくらい安い値段でおいしい食事をするができます。かならずしも無料ではありませんが、自由に入って食べられる空間は、いたるところに出てきています。

インドのシク教徒の寺院には、足を洗い、頭にターバンを巻けば、宗教、性別、※門地、国籍を問わず、誰でも入れる無料食堂があります。だいたいナンとカレーですが、寺院のヴォランティアと職員さんが、毎日カレーをつくり、無償で提供しています。現在、食糧はつくりすぎの傾向にあり、企業や国の倉庫で眠っています。こんな食堂が世界中に広がれば、その食糧をそこで利用するだけで、飢餓はかなり減らせることができます。二〇一六年の国連の統計では、現在飢餓の状態にある人は八億一五〇〇万人と言われ、増加傾向にあるとされています。地球上の二パーセントが飢えているのです。

もちろん、その半分以上は紛争地帯ですから、戦争を止めることが飢えをなくすために必要です。それは、とても困難な歩みです。ただ、宗教や国籍を問わないで誰でも受け入れる無料食堂の試みは、そういった歩みの難しさをちよつとずつ軽減してくれるように思います。

(藤原辰史「食べるとはどういうことか」による)

〔注〕

※ヴァーチャルリアリティ：コンピューターを用いて人工的な環境を作り出し、あたかもそこにいるかのように感じさせること。仮想現実。

※高尚：程度が高く上品なこと。

※サプリメント：食品中の特定の栄養成分を錠剤、カプセル、飲料にして提供する補助食品。

※レシピ：料理の調理法。

※門地：家から。社会的地位。

※飢餓：食べ物がなくて飢えること。

〔問題1〕

「胃に穴をあけて、そこからご飯を流し込む」という方法をとらない方がよい理由について、文中の言葉を用いて五十字以内で説明しなさい。

〔問題2〕

「わたしの考えていること」とはどのようなことか、文中の言葉を用いて五十字以内で説明しなさい。

〔問題3〕

あなたは「食べものの未来」について、どのように考えますか。四百字以上五百字以内で書きなさい。ただし、次の「条件」と「きまり」にしたがって書くこと。

〔条件〕

① 第一段落では、現在進行中の二つの「食べものの未来」についてまとめる。

② 第二段落では、①で書いたことに対する筆者の考えをまとめる。

③ 第三段落では、①・②の内容をふまえ、具体例を交えながら、あなたの考えを書く。

〔きまり〕

○ 最初の行から書き始めます。

○ 段落をかえたときの残りのますめは字数として数えます。

○ ただし、問題1・問題2は、一ますめから書き、段落をかえてはいけません。

○ 、や。や「などもそれぞれ字数に数えます。ただし、。と」は同じます目に入れ、一字と数えます。